

板野中学校 同和教育だより

MY SKY No. 11

マイ・スカイ

2000年10月3日(毎月第1・第3火曜日きまぐれ)発行

発行者

編集・文責
駐吉成正士
副次本知己

◇「この子を残して」を通して今の自分を見つめる……(2年生第2回全体学習;10月3日)

前号で、徳島ミュージカル劇団「びいたあばん」による2000年記念公演ミュージカル「チャンス ほんの少しの愛をください」について紹介させていただきました。その紹介にもあったように、このミュージカルは「白血病」「骨髓移植」というのがテーマの一つとなっているわけですが、実は白血病は、目には見えない放射線というものを浴びることで発病するといわれています。レントゲンなんかもその一つですが、現代では適切に取扱いさえすれば、ほとんど影響がないといわれています。しかし、14年前に起こった旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所事故や、つい先日茨城県で起きた放射能漏れ事故は、放射能の恐さをあらためて思い知らされることとなりました。

さて、その他にもみなさんがよく知っている放射能の恐ろしさとして、原子爆弾が挙げられるのではないのでしょうか。3年生のみなさんは、去年の修学旅行の時に平和学習として深めたと思います。そして今年は、2年生のみなさんが、やはり平和学習の一貫として取り組んでいます。次に挙げる資料を通して全体学習を行うわけですが、良い機会なので、みなさんも読んでみてください。

「この子を残して」

永井 隆

うとうとしていたら、いつの間に遊びから帰ってきたのか、カヤノが冷たいほほを私のほほにくっつけ、しばらくしてから、

「ああ、……お父さんのにおい……」

と言った。この子を残して—この世をやがて私は去らねばならぬのか！母のにおいを忘れたゆえ、せめて父のにおいなりとも、と恋しがり、私の眠りを見定めてこっそり近寄るおさな心のいじらしさ。戦の火に母を奪われ、父の命はようやく取り止めたものの、それさえ間もなく失わねばならぬ運命をこの子は知っているのだろうか？

枯木すら倒るるまでは、その幹のうつろに小鳥をやどらせ、雨風をしのがせるとい

う。重くなりゆく病の床に、全く身動きもままならぬ寝たきりの私であっても、まだ息だけでも通っておれば、この幼子にとっては、寄るべき大木のかげと頼まれているのであろう。けれども、私の体がとうとうこの世から消えた日、この子は墓から帰ってきて、この部屋のどこに座り、誰に向かって、何を訴えるのであろうか？

—私の布団を押し入れから引きずり出し、まだ残っている父のにおいの中に顔をうずめ、まだ生え変わらぬ奥歯をかみしめ、泣きじゃくりながら、いつしか父と母と共に遊ぶ夢のわが家に帰りゆくのであろうか？夕日がかつと差し込んで、だだっ広くなったその日のこの部屋のひっそりした有様が目に見えるようだ。私のおらなくなった日を思えば、なかなか死にきれないという気にもなる。せめて、この子がモンペつりのボタンをひとりではめることのできるようになるまで……なりとも—。

私の皮膚は白血病の特有の青さで、見ただけでも気味がわるい。脚も腕も細るだけ細り、これ以上は骨が邪魔になってやせられないところまで来ているから、もうやせる心配はない。若くしてバスケット・ボールの選手をしていた頃には、身長１７１センチ、体重７１キロという好い体格だったので、久しぶりに会う友達是一目見ただけで涙ぐむ。

全身やせ細っていて、腹だけがこれ以上は皮が伸びないところまで膨れている。なんのことはない、腸満にかかった青がえるだ。腹のまわりが、へその高さで９１センチ、ちょうど妊娠１０ヶ月目のおなかの大きさにひとしい。これは脾臓が途方もなく大きくなっているからである。脾臓はもともと手のひらより小さいくらいのもなのだが、私の腹の左半分全部を占領してまだ余り、へそを越して右の方へかなりのさばり出ている。この張り切れるだけ張り切った脾臓に、外から何かちょっと一打ち当てると、たちまち裂けて、内出血を起こして死なねばならぬ。まるでダイナマイトを腹の中に入れているようなもので、油断ができない。

子どもは親にすがりつきたがるものである。学校から帰れば、タダイマッ、と叫んで飛びつきたかろう。しかし私に飛びついたら、脾臓はたちどころにパンクするに決まっている。それで子どもたちは主治医の朝長先生から「お父さんのそばへ寄ってはいけません！」と言いつけられているのだ。子どもたちはこの言いつけをよく守り、そばへ寄りたい、じゃれつきたい、すがりつきたい、甘えたい想いを押さえ、いつも少し離れて私と話をする。私の方も、世のつねの父親のように、この子を抱き上げたり、ひっくり返して押さえつけたり、くすぐったり、キャッキャッ言わせて遊びたい。けれどそんな

ふうになっている子どもたちがいつしか慣れて、こちらがうっかり眠っているときなどに、いきなりドンと飛びついたり、寢床のすぐ傍らでふざけ合って私の上に倒れかかってこぬものとも限らない。それを防ぐために私は心をことさら冷たくして、寢床の周りに本を積み、薬びんを並べて、愛情を隔てるバリケードを築いている。

カヤノが遊びから帰ってきて、私の眠っているのを見定め、こっそり近寄って、お父さんのにおいを求めたのは、こんなわけがあるからであつた。

私も……我が子のにおいを久しぶりに味わった。白血病といえば、なんだか真っ白い血が冷たく流れているような気がするが、その私の血管の中に久しぶりに熱いものが流れ始めた。私はぐっとこの子を抱きしめたくなった。親犬と子犬とが遊ぶように、どこでも構わず、かみついたり、なめたり、たたき合ったり、ゆさぶったり、思い切り体と体とぶっつけ合って、時のたつのを忘れてみたい。そうしたらこの子はうれしさに息もつまり、笑いが重なって身もだえするであろう。脾臓が裂けるなら裂けてもいいじゃないか。この子がほんのほんのひと時でも私から父の愛を受けて悦んでくれたら……。だが、私にはそれが許されない。一月でも、一日でも、一時間でも長く生きていて、この子の孤児となる時をさきに延ばさねばならぬ。一分でも一秒でも死期を遅らしていただいて、この子のさみしがる時間を縮めてやらねばならぬ。胸の中に桜島の煙のように時々ぐっと噴き上がる愛情をおさえ、私はことさら冷たく子どもを遠ざけておらねばならぬ。ぐっとおさえると、かえって大きくたぎって噴き上げる、まくらもとの火鉢の湯沸かしの湯気にも似た骨肉の情である。もう一人の親—母がおりさえすれば、この子も父をあきらめて、その母にとりすがるのであるうちに、その母は亡く、母のにおいの残った遺品もなく、面影をしのぶ写真さえ焼けてしまつて一枚もない。

私がやっぱり眠ったふりをしていると、カヤノは落ち着いて、ほほをくっつけている。ほほは段々あたたかくなった。

何か人に知られたくない小さな宝物をこっそり楽しむようにカヤノは小声で、
「お父さん」

と言った。

それは私を呼んでいるのではなく、この子のちいさな胸におしこめられていた思いがかすかに漏れたのであつた。

サンパウロ出版「この子を残して」より

今年から、徳島県の同和教育資料として「わたしの願い」に載ったものです。^{ながい いがくは}永井医学博

士は、レントゲンと原子爆弾という二つの大きな放射線を浴びて白血病を発病したと言われています。私は初めて読んで、不覚にも涙がこぼれてとめることができませんでした。私が二児の父親だということもあると思いますが……。その後、何度読んでもやっぱり涙がじんわり浮かんできます。

読んでいていろんな思いが駆け巡るのですが、同和教育とは、親子関係、家族関係、友達関係、さまざまな人間を見つめ直し、豊かにしていくものだな～とつくづく思うんです。

柔道「金」 井上選手

「康生」上を向いて歩かんか

亡き母の言葉胸に

【シドニー21日共同】右坂に「表彰台の一番上で、母の遺影を両手で高く差し上げた。「死にものぐるいでやった。お母さんに最高のプレゼントができた」。

柔道男子100kg級で井上康生選手（三）が二十一日、圧倒的な強さで金メダルを取った。母の死を乗り越え、夢をつかみ取った。スランプだった昨年春、母かず子さんから手紙を受け取った。こうあった。

「初心に帰れ、康生。下を向くな。上を向いて歩かんか。かず子さんは同年六月、くも膜下出血のため五十一歳で急死。これが最後の手紙になった。同十月の世界選手権は、母の名を

黒帯に刺しゅうして戦い、優勝。次の目標を（の）目に合せてきた。

父明さん（三）は、息子が小五で日本一になった直後の会話を覚えている。柔道の指導にのめり込み、夫婦の関係にきしみも出始めた時期だった。

毎夜、石段登りをさせた宮崎市の公園で、「お父さん、ふてえ（身の丈に合わない）夢見ちゃったか（見たのか）」「と漏らした。息子は答えた。そんなこと言わんで。ぼくは柔道するために生まれてきた子やと思う。だからもっと鍛えて。こが出发点だった。

山下泰裕男子監督（四）を慕って神奈川県東海大相

模高に進む。自分と同じく、高校生で全日本選手権に出場した教を「欠けた胸がときめく選手です」とテレビで語った。

だが、三年のインターハイ神奈川県予選決勝でまさ

かの敗退。かず子さんはうなだれる母の手から二位の表彰状を奪って言った。「おきさし一番は似合わ」。役員の前で表彰状を破り捨てた。

明さんは言う。「行為の是非はともかく、康生にかける思いは家内のほうが強かった。育てたのは本当は

あいつだった」

男三人兄弟の末っ子。小学校時代、家族内証で二年間、近くに住む離職の女の子をおぶって通学した。中学では試合前、母親の手を握ることを断った。アルバムでもいつも母に寄り添っている。

かず子さんは亡くなる直前まで日記をつけていた。勤務先の銀行の事務ノートに十三冊。「康生」の文字

が毎日のようにある。そこだけは赤いペン。こう書いてある。「康生、あんたは絶対に世界一になれる。自分を信じなさい」

試合後のインタビューで「佐藤さんという第二のお母さんが病氣と闘っています。元氣になつてくださーい」と語った。

第二のお母さんとは佐藤宣雄・日本選手団総監督（五）の妻久美さん（五）のことだ。

柔道男子100kg級で獲得した金メダルを胸に、母親のかず子さんの遺影を掲げる井上康生選手（シドニー展示場ホール（共同））



sydney

sydney

飲食店で、工事現場で、多くの外国人労働者が暮らす東京・新宿。差別されがちな人々と共に生きる街づくりを目指し、連続イベント「多文化たんけん」を企画した。各国語を用いた防災訓練から、エスニック料理の舞台を訪ね歩くツアーまで幅広い。

「外国人との共生は先進国共通の課題です。無理に仲良くなくてもいいけど、いざという時には、助け合える大人の関係をつくりたい」と意気込む。

きっかけは石原慎太郎東京都知事の四月の発言だった。大災害の際に「不法入国した外国人による「騒擾（そじょう）事件が想定される」。同様のデマが流れた関東大震災では、在日朝鮮人が虐殺された歴史があるだけ

辛 淑玉さん



に、「扇動するような人をリーダーにしちゃいけない」と批判の声を上げた。

デモや集会に参加する一方、既に住民の十二人に一人が外国籍という新宿区の実像を示すため「たんけん」を立案。ボランティアの輪が広がり、イベントは約七十に膨らんだ。

「ごみを分けなくて捨てる外国人には、近隣住民から不満も出る。しかし、言葉の壁や生活習慣の違いから、分別収集制度自体を理解していない人々もいる。」

「まず、お互いを知らないといけない。その上で、新しいルールを作っていくかなければ。東京ならではの多文化共生のモデルができるはずだ」

韓国籍だが、笹塚生まれ、神田在住の「三代続いた江戸っ子」。けんが好きを自認し、人材育成コンサルタント業の傍ら、社会問題に積極的に発言してきた。

「けんかは強いやつとやるものなのに、石原さんは抵抗できない外国人をいじめた。今回は勝たなきゃいけない」。四十一歳。

♪# 新・ひとり・ジャズ ♪

2年生が修学旅行に行っている間に、第51回徳島県同和教育研究大会というのが行われます。10月12日・13日に徳島市内を中心として講演や話し合いが行われるのですが、その時にある講演会(文化センター；12日10:55～12:30)が面白そうなので、紹介しておきます。辛淑玉さんという方なのですが、保護者のみなさんも、時間があるようならぜひ聴きに行ってみてください。右の記事は、新聞に載っていたものです。



◇ これからの日程 ◇ ☆☆☆ ★★ ★☆☆ ☆☆☆ ★☆☆ ☆☆☆

- 10月3日(火) 2年生第2回全体学習(2年A組資料「この子を残して」)⇒みんなで考えよう!
 11日(水)～14日(土) 2年生修学旅行(中国・九州地方)⇒吉成も行きまっせえ～!
 12日(木)・13日(金) 第51回徳島県同和教育研究大会(徳島市立文化センター他)
 17日(火) 3年生第1回全体学習(3年B組)⇒さあ、3年生のみんな、やってきたぞ!
 17日(火)・18日(水) 1年生宿泊訓練(牟岐少年自然の家)⇒次本が行きまっせえ～!